

宮沢賢治作品の幻想性の由来 — その方法論と体験特性 —

浜 垣 誠 司

(高木神経科医院)

キーワード：宮沢賢治，心象スケッチ，イメージ，空想傾向，解離，自我境界

はじめに

宮沢賢治の作品は、様々な幻想的な描写にあふれており、それは彼の文学の本質的な特徴の一つともなっている。本稿では、この幻想性の由来を、彼自身が「心象スケッチ」と名づけた独特の文学的方法論と、彼が生来持っていたと思われる体験特性との、二つの側面から考察する。

前者においては、賢治が若い頃から「世界のあらゆる存在はただ心における認識現象にすぎない」という唯心論的な世界観を抱いており、外的現実とはすなわち心象であるとの立場から「心象スケッチ」を行ったこと、またその際に彼は、夜を徹して野山を歩きつつ自らの感覚を記録するなど、とりわけ超現実的な体験をしやすい状況に自らを置いていたことが、注目される。

後者においては、賢治の作品に現れる幻想的な体験は、解離現象として理解できるという柴山の指摘に立脚しつつ、彼が幼少期から周囲に対して非常に共感性が高かったという数々の逸話や、また思春期には容易に催眠状態に陥ったこと等をもとに、「自我境界の薄さ」という観点から、彼の作品に描かれた体験やその思想について検討する。

I 「心象スケッチ」の世界観とその実践

賢治の言う「心象」とは何か

宮沢賢治は、生前に刊行した唯一の詩集である『春と修羅』の「序」において、「これらは二十二箇月の／過去とかんずる方角から／紙と鈹質インクをつらね（中略）ここまでのもちつゞけられた／かげとひかりのひとくさりづつ／そのとほりの心象スケッチです」と述べ、自らの口語詩のことを「心象スケッチ」と呼んだが、実はこの呼称は詩だけを指すものではなく、散文をも含んでいた。やはり生前に刊行した唯一の童

話集『注文の多い料理店』の自筆の「広告文」には、「この童話集の一例は実に作者の心象スケッチの一部である」と書いており、自らの童話のことも「心象スケッチ」と呼んでいたのである。

賢治は岩波茂雄あての書簡において、「詩といふことはわたくしも知らないわけではありませんでしたが厳密に事実のとほりに記録したものを何だかいままでのつぎはぎしたものと混ぜられたのは不満でした」と述べており、彼はこの「心象スケッチ」という独自の的方法論に、相当の自負を抱いていたと思われる。それは、彼独特の世界観と、その上に立った実践的な創作手法の両者を含むものであったが、その全体像を検討する端緒として、まず彼が「心象」という語で何を意味していたのかを、検討しておく。

明治から大正期の日本において、「心象」という語が一般的にどのような意味で用いられていたかを明らかにするために、「国会図書館デジタルコレクション」に収録されている明治および大正時代に出版された書籍の中で、書名または目次に「心象」の語を含んでいるものを検索した。2019年11月の時点で78件がこれに該当し、その中でインターネット閲覧ができるものは、36件あった。

この36冊の書籍において用いられている「心象」の意味を調査して分類すると、下表のようになった。

表 明治大正期の書籍における「心象」の意味

意味	件数
イメージ	16
心的現象全般	12
心霊	3
智情意	2
その他	3
計	36

当時の「心象」の意味としては、「イメージ(心像)」と「心的現象全般」の二つが主流であるが、「智情意」も概ね心的現象全般を指すことから後者に含めると、さらに両者の割合は拮抗する。

問題は、宮沢賢治が「心象」という語をこれらの中での意味で用いていたのかということであるが、彼の実際の用例を見ると、いずれも心に映じている何らかの「像」を指しており、「イメージ」の意味であったと考えられる。また、詩「高原の空線はなだらかに暗く」には、「心象」の語に自ら「イメージ」とルビを振っている箇所があることから、賢治は「心象」という語を、「イメージ(心像)」という意味で用いていたと判断できる。彼の「心象スケッチ」は、「イメージ心理学会」の題材として取り上げるのに、まさに相応しいものと言える。

賢治の「心象」と心理学的「イメージ」の相違

しかし一方で、賢治が言うところの「心象」と、心理学的な「イメージ」との間には、重要な相違もある。

心理学において「イメージ」とは、何らかの心的な像のことであるが、その中で外界の直接的知覚像や錯覚や幻覚のように、本人の意志を離れて受動的に体験されるものは、除外するのが通常である。しかし宮沢賢治が言う「心象」は、外界の直接的知覚像や幻覚を含み、己の心に映ずる全ての「像」を指すものであった。むしろ、外界の知覚像や幻覚こそが、彼にとっては「心象」の中心をなすものだったとも言える。

言いかねば賢治は、内的に想像された表象と、外的現実の知覚像とを区別せずに、まとめて「心象」と呼んだわけであるが、この態度は、彼の世界観における重要な特徴を反映するものであった。実は賢治は、「この世界において外的現実と見なされているものは、本当は個人の内的表象に過ぎない」と考えていたのである。

賢治のこのような考えは、若い頃では学生時代の書簡において、「戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候」「石丸博士も保阪さんもみな私のなかに明滅する。みんなみんな私の中に事件が起る」などとして述べられており、また『春と修羅』の「序」では、「けだしわれわれがわれわれの感官や／風景や人物をかんずるやうに／そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに／記録や歴史、あるひは地史といふものも(中略)われわれがかんじてゐるのに過ぎません」という形で表明されている。

賢治はこのような世界観を、仏教の唯心論的な思想から学んだと思われるが、主観と客観を区別しない彼の「心象」は、フッサールの「純粹現象」や、ベルクソンの「イメージ」、西田幾多郎の「純粹経験」に

も通ずるものである。

実践行為としての「心象スケッチ」とその結果

ところでフッサールは、人間が「種々の事物が自己の外部に、自己の心的状態から独立して存在する」と素朴に知覚し経験している際の態度を「自然的態度」と呼ぶ一方、世界の根源に遡るためには、そのような素朴な感受の仕方をいったん「括弧に入れ」て、外界と内界を区別する以前の「現象そのもの」に戻る必要があると説き、この態度変更を「現象学的還元」と呼んだ¹⁾。これは図らずも、宮沢賢治が「心象スケッチ」の前提として「世界」の外的実在性を捨象し、ただ心的現象と見なしていたことと、同趣旨の行為と言える。すなわち賢治は、「心象スケッチ」という方法による創作を行いつつ、常に現象学的還元を実践していたのだとも言える。

このことは、賢治の作品の空想性とも関わっていたと思われる。個々人の持つ「空想傾向(fantasy proneness)」の程度を評価する軸の一つとして、「現実と空想の区別が曖昧か／判然としているか」という尺度が用いられる²⁾が、賢治は「心象スケッチ」を行う際に、世界に対して上述のような態度をとることにより、この区別を意図的に曖昧化し、内的表象と外的知覚とを努めて同列に扱いつつ、創作を行ったわけである。このような創作態度は、彼の作品の空想性・幻想性を高める一つの要因となったと考えられる。

さらに、彼がこのような「スケッチ」を行っていた状況を具体的にしてみると、昼間の体験も種々描かれている一方、夜を徹して野山を歩いたり野宿をしたりしつつ、あるいは真夜中の汽車や船の甲板で、己の体験を手帳に書きとめたというものも、相当に多く含まれている。

一般に、このように身体的疲労や睡眠不足を伴う状態において、人間は錯覚や幻覚を体験しやすくなるものであり、それは例えば、夜を徹して比叡山の山道を巡る「回峰行」や、阿弥陀如来を念じて休みなくその像の周囲を巡る「常行三昧」の厳しい修行中に、行者がしばしば「仏に会う」などの神秘体験をすることにも表れている。賢治の「心象スケッチ」のうち一定の部分は、自らあえてそのような限界状態に身を置きつつ、記録されたものだったのである。

すなわち、宮沢賢治が実践していた「心象スケッチ」という行為は、心理的側面においては、現実知覚と表象の区別を意図的に排することによって己の空想傾向を高めるものであり、また身体的側面においては、しばしば自らを限界状況に追い込むことによって、とりわけ神秘体験の起こりやすい状態を作り出すものであった。

このような彼独自の創作の方法論が、その作品に濃厚な幻想性を帯びさせる一つの要因になったのではないかと、筆者は考えている。

II 宮沢賢治の体験特性

共感性と催眠感受性の高さ

宮沢賢治は、幼少期から周囲の人の痛みをまるで自分の痛みのように感じる傾向があったという、いくつかのエピソードが伝えられている。道で荷馬車の車輪に指を轆かれた子を見ると、「いたかべ、いたかべ」と言って、血と泥の付いたその指を自分の口に入れて吸ってやったとか、小学校で悪戯をした子が、罰として水の入った椀を持って廊下に立たされているのを見ると、「ひどいだろう、たいへんだろう」と言って、あつという間にその水をゴクゴク飲み干してしまったなどと言われている³⁾。このような子供時代の咄嗟の行動は、後天的に身に付けた道徳心のためというよりも、理屈以前の生来の感性に基づいたものと思われる。

誰しも、「他人の痛みを我が事のように感じる」という他者に対する共感性を、それぞれの程度に応じて持っているが、上のような賢治の行動は、その共感性が人並み以上に高いことを示している。彼が晩年に手帳に書きつけた「雨ニモマケズ」には、「ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキ」という一節があり、このような人の役に立たないテクノボー的行動は、彼の「共苦」の姿勢を表していると言われるが、これも「そうせすにいられない」という彼の共感性の高さを表していると言えよう。

一方、中学時代の賢治は、ある人物から「静座法」なる健康法の指導を受けた際に、「四十分にして全身の筋肉の自動的活動を来し」たと、父親あて書簡に書いている。後に賢治はこの人物を自宅に招いて、家族にも静座法を受けさせたが、妹のトシはすぐに催眠状態に陥った一方で、父親には何事も起こらなかったということである³⁾。

この「静座法」とは、大正初期に広く流行した「岡田式静座法」と思われ、実際に当時この静座法を行った人は、かなりの割合で「動揺」と呼ばれる状態に入り、その際には身体が様々な形で勝手に動き出したという⁴⁾。これは、医学的には「心理自動症 (psychomotor automatism)」と推測され、自動書記などと同様の催眠現象の一種であったと考えられる。当時の記録によれば、一般的に早い人で静座法を始めて2～3日で、この「動揺」が出現したということである⁵⁾。

この「早い人で2～3日」という期間と比べると、賢治が静座法を行った初日の40分で身体の動揺を呈

したというのはさらに早いものであり、賢治は催眠感受性が相当に高い方だったと推測される。

「自我境界」「心的境界」の薄さ

フロイトの最古参の弟子の一人であったフェダーンは、「自我境界 (ego-boundary)」という概念を提唱し、その「自我心理学」の中心を概念の一つとした⁶⁾。これは、「自我」と、世界のそれ以外の部分 (非自我) との「境界」を指すもので、外界との間の境界は「外的自我境界」、自らの内界 (無意識) との間の境界は「内的自我境界」と呼ばれる。フロイトが自我の「機能」を重視したのに対し、フェダーンはフッサールの現象学の影響も受けつつ、自我というものを「主観的体験 (Erlebnis)」として捉えたのが特徴である。

前述のような「共感性の高さ」や「催眠感受性の高さ」という特性は、周囲からの影響によって、自我の状態が容易に変化してしまうということであるから、この自我境界という概念を用いれば、「自我境界の薄さ」として捉えることができる。宮沢賢治という人は、生来「自我境界の薄い人」だったと言えるわけである。

一方、近年ハルトマンは、より広義の「心的境界 (boundaries in the mind)」という概念を提唱し、フェダーンの言う自我境界に概ね重なる「知覚の境界」や「意識と無意識の境界」に加えて、「思考と感情の境界」「覚醒と睡眠 (あるいは夢) の境界」「記憶の境界」「身体や個人空間の境界」「対人境界」「自己同一性の境界」等を含めた多様な境界について論じている⁷⁾。そして、これら様々な境界が薄いか／厚いかという程度は、一個人の内ではかなり相関していることを見出し、そういった「心的境界の薄さ／厚さ」という特性は、パーソナリティの新たな尺度として有用であると主張している。

さらにハルトマンは、心的境界の薄さ／厚さに関する評価尺度を作成して、これを866名に対して施行した結果の因子分析から、「境界の薄い人」の特徴として、「イメージが現実のように鮮明である」「共感覚体験がある」「よく放心状態になる」「予知夢を見る」「子供との同一視」「共感性が高い」「催眠感受性が高い」「創造性・芸術性に富む」などの項目を挙げている。

上記の特徴は、いずれも宮沢賢治に非常によく当てはまる傾向であり、賢治はハルトマンの意味でも「心的境界の薄い人」だったと言える。賢治の作品においては、人間や動植物や無生物の間の境界も非常に薄く、全ての存在が交流し交歓する様がしばしば描かれるが、これもまた「境界の薄さ」の表れと言うことができよう。

自我境界と解離

フェダーンは、自我境界とは地図上の境界線のような静的なものではなく、一種の末梢感覚器官のように、常に動的に機能しているのだと強調していた。彼は、外界からの対象刺激が、外的自我境界を通して自我にもたらされる際には、この境界で「現実感」が付与されることによって、それらの刺激は「外的現実」として自我に体験されるのだと考えた。一方、「無意識（イド）」にある対象は健康な状態では、直接に内的自我境界を通して「自我」に到達するわけではなく、「前意識」を経由して内的自我境界を通過するが、この境界で「自我感情（ego-feeling）」が付与されることにより「自我化（egotization）」され、自己所属感を帯びて体験されると考えた。

そしてフェダーンは、病的な精神症状のいくつかを、このような自我境界機能の不全によって説明している。その中で、「現実感消失症」と「離人症」においては、いずれも自我境界へのリビドー備給が減少しており、これによって前者では自我に流入する外的刺激に伴う現実感が低下し、後者では自らの内的体験に伴う自我感情が低下しているのだと考えたのである⁶⁾。

現実感消失症や離人症は、現在は解離症状の一種として理解されているが、筆者は、このように自我境界の変化に着目するフェダーンの考え方を、他の種類の解離症状にも、敷衍することができると考えている。

先述の「現実感消失症」とは逆に、「気配過敏」や「被注察感」においては、周囲の出来事が過剰な圧迫感や意味を帯びて体験されるが、例えばこれは、外的自我境界の透過性が異常に充進し、外的刺激が過剰な意味を帯びて自我に流入している状態と考えることができる。

また解離性障害には、幻聴や幻視などの幻覚体験も伴うことが多く、これは統合失調症における幻覚とは質的に異なることから「解離性幻覚」と呼ばれている。このような幻覚の発生機序はまだ明らかにされていないが、これも自我境界において、本来は内界からの刺激に「自我感情」が付与されなければならないところを、誤って「現実感」が付与されてしまうのだと考えれば、これも自我境界の病理として理解することができる。

宮沢賢治の作品には、上に挙げたような現実感消失症、離人症、気配過敏、被注察感、幻覚等の体験の描写がしばしば現れ、彼の作品世界の幻想性を際立たせているが、柴山は賢治のこのような体験は、全て解離現象として理解できることを示した⁸⁾。演者も、この柴山の説に深く賛同するものである。

ここで上述のように、解離現象全般を「自我境界の変容」として捉えるならば、このような体験特性は、

賢治の自我境界が薄く、自我が容易に周囲からの刺激に反応し、またその境界面が伸縮自在・変幻自在であるということの結果として、一括して理解することができる。

賢治の作品には、自我と世界が溶け合ってしまうような恍惚状態の描写が見られる一方、「農民芸術概論綱要」には、「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」「われらに要るものは銀河を包む透明な意志巨きな力と熱である」などと、自我と世界や宇宙を合一させようと説く主張が並べられている。このような世界合一体験は、自我境界が限りなく拡大した結果と考えられるが、これも彼の自我境界が薄く柔軟であったためと考えれば、他の解離体験と一つながりのものとして、理解することができる。

ハルトマンは、「境界の薄い人」に見られうる特徴として、自分に予知能力や千里眼の力があるという信念も挙げているが、これは解離傾向の高い人の一部にも認められることであり、ここにも解離と心的境界の薄さの関連がうかがわれる。実際、賢治も自分が恩師の死を予知する幻影を見たというようなことを、友人あての書簡に書いている。

以上、賢治の他者に対する共感性が並外れて高かったこと、催眠感受性が高かったこと、様々な解離体験をしていたこと、他者や宇宙と一体化しようとする傾向を持っていた等の、彼の生来の特性は、「自我境界の薄さ」として、包括的に捉えることができる。そして、このために現実と空想が渾然一体となり、幻覚を含めた様々な解離体験をしばしば経験していたことが、彼の作品に独特の幻想性を付与することになったと考えることができる。

おわりに

以上、宮沢賢治という人は、生来の特性として「境界の薄い人」であり、他者に対する共感性が高く、空想傾向が高く、解離的な神秘体験をしばしばしており、時に他者や宇宙との合一感に我を忘れた。

また、賢治が創作の方法論とした「心象スケッチ」は、外的現実と内的表象の間の区別を意図的に排しつつこの世界を見ようとする態度を基盤としており、これが結果的に現実と空想の境界を曖昧にして、作品世界の空想傾向を高めることになったと考えられる。また彼が、しばしば身体を限界状況に追い込んで創作を行っていたことも、その体験内容に幻想的な要素を強めたと考えられる。

引用文献

- 1) Husserl, E : Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, 1913 (渡辺二郎訳: イデーン I. みすず書房, 1979)
- 2) 岡田斉, 松岡和生, 轟知佳: 質問紙による空想傾向の測定 Creative Experience Questionnaire 日本語版 (CEQ-J) の作成. 人間科学研究第 26 号, 2004
- 3) 天沢退二郎他 (編): 新校本宮沢賢治全集 第十六巻 年譜篇. ちくま書房, 2001
- 4) 岸本能武太: 岡田式静坐三年. 大日本図書, 1914
- 5) 荒井倉三郎: 実験 岡田式静坐法. 日本書院, 1917
- 6) Federn P : Ego Psychology and the Psychosis. Imago Publishing Co Ltd, 1953
- 7) Hartmann, E : Boundaries in the Mind: A New Psychology of Personality. Basic Books, 1991
- 8) 柴山雅俊: 解離性障害—「うしろに誰かいる」の精神病理. ちくま新書, 2004

The Origins of the Fantasies of Miyazawa Kenji's Works — His Method and Sensory Trait —

SEIJI HAMAGAKI
(TAKAGI PSYCHIATRIC CLINIC)

THE JAPANESE JOURNAL OF MENTAL IMAGERY, 2020, 18, 21 – 25.

The works of Miyazawa Kenji are full of fantastic descriptions and it may be the essential characteristic of his literature. The author discusses the origins of these fantastic characteristics from Miyazawa's original literary method called 'mental sketch' and his innate sensitive trait.

In the former aspects, Miyazawa had a view of the world which regarded all things were perceptive phenomena in the mind, and he wrote poems called 'mental sketches' from this viewpoint. Furthermore, he frequently recorded his 'mental sketches' during all-night ramble in the mountains and wilds or on the night train and ships. These situations probably made him experience supernatural phenomena which are the characteristics of his poems.

In the latter aspect, Miyazawa was highly sympathetic to others from childhood and showed high hypnotizability in puberty. These episodes suggest the thinness of his ego-boundary. The author also discusses that the dissociative experiences which Shibayama pointed out in the Miyazawa's works can be interpreted as the alteration in the ego-boundary. These sensory traits may also contributed to the fantasies of his works.

Keywords : Miyazawa Kenji, mental sketch, image, fantasy-proneness, dissociation, ego-boundary

